

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版



小説 江崎トオル

挿絵 さあぺんと

プロローグ

第一章 小さな事件

021

第二章 無垢な反逆者

048

第三章 羞恥の学園生活

080

第四章 プール開きの罨

111

第五章 淫獄の虜囚

131

第六章 終わらない悪夢

178

登場人物紹介

Characters



霧島 由香里

霧島家の長女で鳳翔学園高等部の数学教師。シスターガーディアンの長姉、シスタークレアに変身する。

霧島 玲奈

霧島家の次女。鳳翔学園高等部の三年生であり、生徒会長を務める。シスターセリティアに変身。

霧島 つぐみ

霧島家の末妹。鳳翔学園初等部に通う少女。魔力を秘めた指輪を持つ、シスターベイルに変身する。

ゴクッ。

飢狼のような喉鳴りが響いた。と、期限を迎えたのか、少年たちの身体が実体化している。ユニセックスな印象の少年と、短髪に刈り込んだ肥満著しい男子、そして制服の上からでもそれとわかるほど筋肉質な偉丈夫だった。これから自分たちにもたらされるであろう快樂の予感に高揚している男たち。

「あなたたち……！ 小山くんに加藤くん……新見くんまで……。こんなことをして、いったいどういふつもッ」

言葉が終わる前に、口をふさがれた。加藤と呼ばれた逞しい男子が、覆い被さり、その濡れた唇に吸いついたのだ。そのまま足を折り曲げて、まんぐり返しの体位に持っていく。

「んんっ！ ん、んんうっ!!」

耳朶を紅潮させ、眉間に深いしわを寄せて抗いの言葉を発するが、くぐもった呻きにしかならない。屈曲は緩やかではあっても、股間の女性器官を全開で晒しものにされたうえ、上体の動きを封じられる羞恥の格好を強要されているのだ。

——俺も！

拒絶の意思さえ表せない獲物へと、さらに二人の手が伸びる。小山は肥え太った体躯を震わせながら、由香里の頭から少し離れたあたりに膝をつき、床に這いつくばった。

そんな仲間を補助するため、身体をわずかにスライドさせる加藤。

小山はハァハァと息を荒らげながら、乳房の感触を確かめるように繊細なタッチで掌に包み込むと、肉打つ様を楽しむかのように上下左右に揺すり上げながら、膨らみを口いっぱいに頬張って吸引する。

乳房の先端から乳輪の裾野までに広がる乳腺を強力に刺激されたうえ、乳根からは波動のように柔らかな快感が伝わっているのだ。上下から挟み撃ちにされた乳房は全身を喜びに打ち震わせ、ますます弾力と熱を増して男の興奮に拍車をかける。

「んっ、んっ、んんう……うん」

「思った以上だ。先生こんなにスゴイものを隠していたんだね……」

新見少年も負けてはいなかった。先ほどはためらってしまった陰阜への侵略を開始した。およそ経験とは無縁に見える彼だったが、肉欲に呼び覚まされた本能によるものか、執拗な愛撫を女教師の股間へと施していく。しばらく生地越しに肉畝の複雑な凹凸と、それをなぞり上げたときの由香里の反応を楽しんでいたが、とうとうクロッチの縁に手をかけた。

本来ならクロスはそれを身に纏う者の身体にピッタリと吸着し、さながら第二の皮膚と化すため、常人の力ではその緊密な合体を解くことはできない。だが、三女の強大な魔力によって守護の力を封じられてしまったいま、聖女の鬨衣は裸身を淫靡に彩るただの布きれとなってしまうのだ。

新見の指がぐいっと股布を摘み上げたとき、ちょうど加藤の口が離れ、自由になった口

から女の絶叫が迸った。

「ずらしちゃダメえ!!」

——ドブドブドブドブドブ……。

股布をずらされ、溜まりに溜まった吐淫が堰を切ったように垂れ流れた。蜜壺で煮えたぎっていた白濁の濃厚な粘り汁が、引力に従って聖女の衣装に川を作り、肩口からマツトへと注ぐ。それは吸収されないまま床へと溢れ、肉の匂いを振りまく水たまりへと姿を変えていった。

「うわっ！ 先生……こんなに？ ……本当は、気持ちよくて仕方がなかったんだね」

あどけなさを残した笑顔で放たれた言葉に、長女は脳裏を白く焼かれていく。

「あああああああ……あ……はあ……」

かつて、少なくとも学園内では自分たちの上にあつたはずの教師が見せた、明らかな「女の貌」。その凄艶な光景を目の当たりにしただけで、少年たちのペニスから露がこぼれる。そして、とうとう我慢ができなくなったのか、全員が申し合わせたようにズボンの前立てを開いて、ペニスを取り出した。身体中に欲望を漲らせた肉根は、どれも亀頭の傘が限界まで開かれ、茎がビクビクと跳ね踊っている。しかし、特に由香里を驚かせたのは、
(この子、可愛い顔して、おちんちんはこんなに……)

新見の股間でそそり立つ肉杭であった。少年の外見にはそぐわない、女を狂わせずには

おかない魔性の凶器。あまり男性経験のない由香里ではあったが、教え子のペニスがどれほどの破壊力を持つものであるかは容易に想像できた。それに、他の二人のペニスも高校生とは思えないほどの猛々しさである。それらが一斉に――。

(……でも……なんとか……耐えなきゃ……)

生徒たちの男根に圧倒されている由香里の思いをよそに、性に狂った野獣たちが挑みかかっていった。加藤が幼児の放尿ポーズにして女体を持ち上げると、あぐらをかいた自分の上に乗せた。そのまま背面座位でペニスを挿入する――だが。

「えっ!? やめてっ! そっちは違うっ!!」

「俺、いっぺんやってみたかったですよ……へへっ」
ズプ。

「ぐううう――ッ!!」

苦痛に歪む由香里の表情。だが、これまでじつくりと炙られ続けた女体は余すところなく解きほぐされていたのか、自ら絞り出した肉汁と男の滴らせた先汁とによって、アヌスは奥の奥まで男根をくわえ込まれてしまった。そのまま抽送が始められる。

「スゲェ……やっぱりこっちも使えるのかよ……」

由香里の尻処女を散らした加藤は、膣とは違ってまんべんなく男根を食い締める感触に、うっとりとしながら呟く。

その言葉が、女の心を刺し貫いた。教え子にとつていまの由香里は淫売同然の存在なのだ。しかし苦惱しつつも、尻穴からビリビリと伝わる未知の感触が、ただの痛みだけではないことに気づかされつつあった。

「抜い……て、抜いて、おねがッ！」

続けざまに口腔を犯された。

「ん——っ！ んぶっ！ んんふうっ！」

小山の滾たぎった肉鋸が喉奥まで突き込まれていた。恥垢だらけの異臭を放つ童貞ペニスを、たっぷりと味わわされる女教師。臭いと苦痛に顔をしかめるが、長い髪をしっかりと掴まれている、逃れるすべはない。歯を立てようにも、自分は『みんなが満足するまで』奉仕しなければならぬのだ。涙が双眸から溢れていく。

肉棒はひと突きごとにストロークを変え、浅く深く、右に左に、口腔粘膜の凹凸をくまなく犯し抜いていた。小山は自分より高い位置にある者に、何よりも汚れた部分を奉仕させる悦びに酔っている。何日か前までは教壇の上から自分を見下ろしていた女の髪を引っ張り、自慰用具さながらに好き勝手な動きを加え、快楽を貪る。

二つの肉壺が、ペニスに蹂躪じゆんされていた。決然として陵辱に耐えるシスタークレア。だが、正義のヒロインであると同時に女であるということをいまさらのように思い知らされていた。被虐の魔悦まごつが由香里の身体と心を蝕み始めている。

だが、それはまだ序曲にすぎなかったのだ。

アヌスと唇に肉棒をくわえ込まされた由香里の目に、豪壮な巨根をそそり立たせた少年の姿が映った。若さを誇るような肉塊は、すでに先汁をまぶされ、ぬめり光っている。

（——だめッ）

慌てて股間を閉じようとした女教師。だが、後ろから回された手で割り開かれ、女の構造を全開にされてしまった。そこに、自らの勃起ペニスに手を添えた少年が、身を滑らせてくる。しかし、由香里には迫りくる脅威になすすべがない。クロスの力を使えば窮地を脱することはできるだろう。しかし彼女は、『みんなが満足するまで』楽しませなければならぬのだ。

「んんっ、んふうっ、んんんんんう——ッ!!」

女体を貫くとどめの一撃だった。哀願の呻きが牝獣の唸りに変わる。たちまち子宮口までレイプされ、想像以上の甘美な衝撃に貫かれた。限界まで弓なりになって頤を仰げ反らせる女。

（こんな……こんなに太いなんて……）

度重なる恥辱によって、普段は褻がみっしりと詰まった肉の隘路あいろは割り開かれ、恥知らずな潤滑液を分泌して男根を欲していたため、豪壮な肉塊をスムーズに呑み込むことができたのだ。

シスターガードイアンとして活動しているために鍛えられた肉体の影響は、括約筋までに及んでいた。肉洞は入口近くでぎゅうっと揉み込むように締めつけて蠢動しており、湯を含ませた真綿で絞り抜かれるような快感がペニスを包み込んでいた。

「先生のせいだよ……先生がそんなに、イヤらしい格好するから……」

「ふはっ、違う、違うのよこれは……っ」

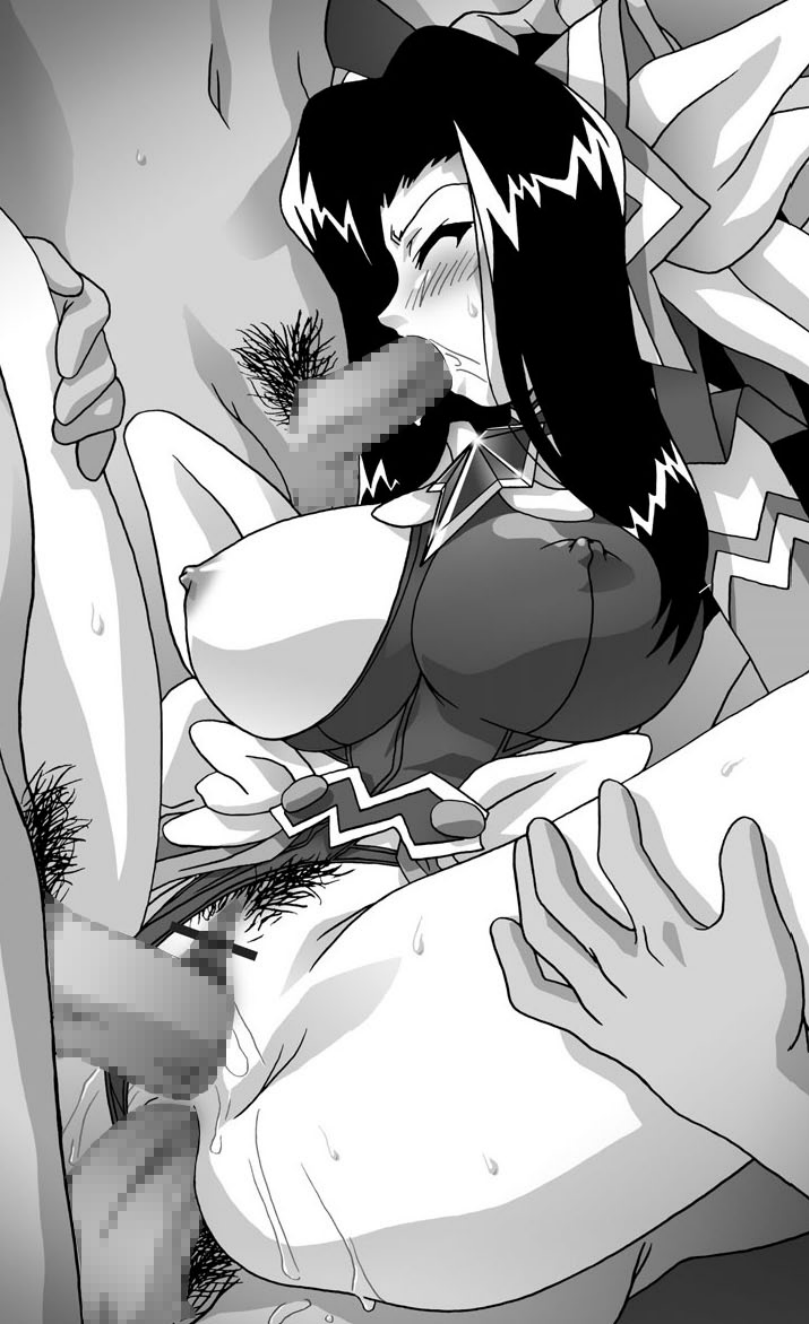
肥満男の隙を縫っての抗弁だったが、すべてを言い終える間もなく、再び肉棒の虜囚とさせられた。女の反逆への怒りを表すかのように、さらに強く激しく口唇を責められてしまうシスタークレア。

腰を打ちつけるたび、眼前で乳飲み子を誘うようにブルブルと激しく揺れる量感たっぷりの乳房。あまりに魅惑的な光景に、とろけた表情の新見少年が手を伸ばした。レオタード状の胸布から、右の乳房をすべて引っ張り出そうとする。半分ほど布を剥いた時点で、自らの弾力とポリウレムのせいでブルンと肉の砲弾が飛び出した。縛めから解き放たれた膨らみは汗まみれで光沢を放っており、さながら熟しきって蜜を溢れさせた果実だ。

その先端では、透明感のある桃色の屹立がいびつな軌跡を描いて頼りなげに揺れており、少年はすぐさま吸いついていく。

「んうっ！」

そして、もう片方の乳房をも自分のものにしていくのだった。布地を引っ張って乳肌の



半分までを露出させると、ちょうど円錐を縦に割るようにしてコスチュームを食い込ませ、それを右に左にせわしなく動かす。すると、クロス縁布が乳首を跨ぐたびに、すっきり充血して痲りきつたそれが何度も何度もお辞儀を強いられ、潰され、揉まれ、弾かれるたびに、女から嬌声めいた呻きを引き出すのだった。

「あつ！ ……あつ……くうつ……くつ！ うううつ！」

すでに強制フェラは手コキと舌先愛撫へと移っているため、由香里は思いのまま、燃え上がる官能のままに、鼻にかかった悶え声を漏らしている。だが、前後の肉穴からもたらされる悦びによつて奴隷教師が舐めしゃぶる舌の動きを止めてしまうと、途端にペチペチという音が響く。

「ああつ！ ……ちゃんとお……す……る、からあうつ、それ……で…叩かないで……」

すつかり滾りきつた硬く熱い肉で横頬をしたたかに叩かれ、うつすらと鴉色とぎを乗せた美貌をカウパーでベトベトにされ、奉仕の精神をたつぷりと叩き込まれてしまうのだ。肉の凶器がS字結腸や子宮を突きまくっているため、懇願のセリフも途切れ途切れで弱々しい（すごく激しい……みんな、私の身体を見ていやらしいこと考えてたんだ……もしかして他の生徒も……?）

その可能性は充分に考えられた。何しろ、三女は姉の眨められる様を楽しんでいるのだ。今日は——いや、いまは三人を相手にさせられている。しかし、この数が今日の放課後に

は、明日の朝には、二倍三倍十倍にもなっているかもしれないのだ。

朝の教室でのホームルーム。自分の可愛い教え子として気を許している男子たち。それが態度を一変させ、目をぎらつかせて自分に襲いかかってくる。「やめなさい！」と言おうとした口に男根を頬張らされ、スーツをまくられてアヌスやヴァギナに次から次へと何本もの勃起ペニス突き込まれるのだ。教卓の上に磔にされた豊熟な裸身に四方八方から手が伸び、ほしいままに鬨り尽くしていく。身体をくまなく獣の劣情に蹂躪され、抗うことのできないまま、白濁の海に沈められていく自分の姿が浮かんだ。すると。

「ぐっ」

前後の淫門をレイプしていた二人が、一斉に呻いた。

「畜生！ こいつ、思ったとおりとんでもねえドスケベ女だ」

「ぐううっ！ そんなに興奮するよ……そんなに僕のが気に入ったの？」

淫蕩な妄想に呼び起こされた興奮が、女体の反応として括約筋へと及んだのだ。特に直腸と違って、子宮へと続く肉路は全体が強烈に収縮したため、巨根を食い締められた男子生徒は一瞬、悶絶しかかったほどだった。

「いやあっ いまのは違うの！ いまっん！」

突如、小山が肉茎を唇に押しつけた。

「ちゃんと舐めろよ!! 二人ばかり気持ちよくさせやがって！ ほら、ここを綺麗にす

るんだ！」

(あ、熱い……)

顔を背けることができなほど強く、陰茎を唇に押しつけられる。女教師は命じられるまま、亀頭冠の裏や、包皮と肉身の間にピチャピチャと舌を這わせて粘ついた恥垢を味わされた。敏感な部分を粘膜で刮がれたため、さらに海綿体が膨らみ、肉傘が開いていく。そうしている間も、ズボズボと女壺を苛む肉の淫撃はやむことなく続いていた。が、抽送が続くにつれて、状況の変化が訪れる。

「あああああつ！ ううつ……そこつ……そこはあ」

責められている女がさらに乱れつつあった。噴き出す汗でコスチュームはすっかり透けている。唯一、二枚布となっている股間部分もずらされ、露わになった肉花とすぼまりがペニスを受け入れるたびに、悦びにひくつき、びちゃびちゃと恥知らずな液汁を飛び散らせ、垂れ流してマットを汚していた。濃厚な肉の匂いが溢れている。

(どうして……そこ……そこがわかっちゃうの?)

先ほどまでの単調な腰遣いではない。

膣の入口近くを暴れ回られ、自慰のときに揉み擦る場所を膨れ上がった亀頭でつつき倒される。菊座を貫いている男根も同様に、右に左に、奥に手前にと、ワンストロークごとに変化をつけた動きで性感を翻弄し、由香里は肛虐の官能を無理やりに開花させられよう

とじていた。

「あぐっ！ ううっ！！ そこ突いちやだめえッ」

加藤も新見も、これまで自分がペニスを突き入れたときの由香里の反応を見て、女の肉壺に位置する急所を見抜いていたのだ。どうやら生徒たちは、どうあつても自分たちの恩師をイカせずにはすまないらしい。

「やめてっ、やめなさい！ やめてえ！！」

「うっ」

ビュルルッ！

突如、生臭い迸りが口内へと打ち出された。爛熟した教師の舌遣いと艶めかしい痴態に屈してしまったのだ。よほどに溜め込んでいたのか陰囊をカラにする勢いで射精し、唇から抜き取ったあとも顔中に龟头を擦りつけ、自らの子種をすり込んでいく。

「うぷっ！ ゲホッ！ やあっ、やああっ」

顔いっぱいにもスベルマを浴びせかけられ、股間からマグマのように湧き上がってくる快楽に半ばとろけた表情の女からは、もはや数学教師として、シスタークレアとしての、知性も品格も感じられない。

上りつめつつある教師の淫靡な姿態に、男子二人の律動が速まった。

ジュプ！ ジュップ！ ジュププ、ジュプッ！

「うつくうっ！ やめっ！ やっ！ やあっ」

二つの穴が、限界まで開ききった肉の傘に挟り回されていた。射精間際のペニスと脈動と躍動を増し、奔放に女を征服していく。乳房も尻も桜色に染めた女が、汁まみれになって腰を振らされていた。

「先生、もっと可愛くしてやるよ」

「え……？」

後ろからの声。次の瞬間、由香里の身体が雷光に貫かれた。

「ぎひいいい——ッ!!」

サーモンピンクのクレヴァスの端で、包皮を押し上げてピーンと張りつめていた陰核。そこを優しく扱き上げられたのだ。

さらに、クリトリスへの残酷なまでに繊細な愛撫は続く。揉み捏ねて押しつぶされ、ますます硬度を増していく。絶えず嬲られている姫肉に、新見の腰が離れたその隙を狙って、小山が吸いついた。

ちゅううううううう。

「んああああっ——！ ああっ、い……いっ！」

とうとう女教師の口から、いままで我慢してきた嬌声が放たれた。口腔から溢れ出た精液が、顎を伝う。

「うあつ、またキツくなつた……先生のマ○コ、スケベすぎるよ！」

教え子の言葉責めに反論することさえできない。

前と後ろから熱い身体が覆い被さってくる。絶頂が近いため、ただでさえ苛烈な挿入が、さらに速度と力を増していく。後ろからアヌスをほじられているだけでも狂いそうなのに、前から責めている巨根の美少年に乳房を鷲掴みにされて吸いつかれ、なおかつ子宮を壊さんばかりの激しい腰遣いで膣肉全体を抉り回されているのだ。

「んっ……ダメ……メ！　ダメよ、抜いて、抜いてえ！　もう突つつかないでえ!!」

返事の代わりに、膣に突き込んでいる少年はむしゃぶりついていた乳房に歯を立てた。

「くあああつ！」

悩乱する女教師の痴態に惹起されたのか、クリトリスを転がしていた肥満体が、新見少年が独り占めしているたわわな果実へと手を伸ばした。教室でそうだったように、乳房が絞り上げながら吸われた。教壇で玩弄されたときに覚えさせられた悦びが、さらに女の倒錯を加速していく。

(このままじゃ……イカされちゃう……！　教え子のペニスで……)

倉庫に淫音が響き合う。肉と肉とがぶつかるたびに、汗、愛液、涎、涙、男女のまぐわいが生み出すあらゆる液体が飛び散ってあたりを生々しい匂いで染め抜いていった。

「先生、僕もいいよ……全部、全部先生にあげるからね」

「こつちも我慢できねえ……たつぷりご馳走してやる」

二人の肉がビクビクと震え出す。瞬間、女はわずかに自身を取り戻した。

「だ……！　ダメよ！　絶対にダメ!!　先生の中に出しちゃだめえっ！」

赤く灼熱した鉄塊が女の股間を貫く。そのたびに、子宮を掴まれて揺さぶられるような陶然たる快感に意識を飛ばされそうになった。

「ぐうっ！　うう！　うん、ああ、あああつ、だ……め……」

そして。

『うッ！』

男たちの声が重なる。同時に子宮口を打ちのめす熱いマグマの噴撃。

ビュッ！　ビュルルルッ！

「ああ……ダメ……だめえ……」

ビュルルルッ、ビュクビュクビュルルッ！　……トプププ。

「だめって……だめって言ったのに……」

肉棒をくわえ込まされたままの二つの穴から、染み出すように濃厚な白濁が溢れていた。少年たちの性欲がそのまま溶け出したような熱泥は、女が吐き出した肉汁と混じり合って、むせかえるような性臭を立ち上らせていく。

すっかり脱力し、敗北感に満たされている由香里。

スライムの暴虐はそれだけにとどまらなかった。ただ入り込むだけではない。彼女の秘処近辺をまんべんなく愛撫していくのだ。

ぷっくりと可愛らしい恥丘がスライムの変形によって左右に押し広げられると、柔らかそうな赤い陰唇が顔を覗かせた。にゅっと伸びたゼリーがそれを口でくわえるように包み込む。そしてその一枚一枚が、ゼリーの細かい蠕動によってマッサージされていた。

「はあはあ……ひい……あ」

股間の中心がむずむずとこそばゆい。冷たかったゼリーはほどよく人肌に温まり、まるで人間の舌が蠢いていると感じてしまうほどにリアルで艶めかしい感触だった。完全に座り込んでしまったセリティアの呼吸が次第に荒くなり、言葉を紡ぐのが難しくなっていく。彼女はどこかうつろな視線を自分の股間に向け、そこから送られてくる刺激にいちいち身体をうねらせて反応していた。自分の身体なのに思いどおりにできない……手が届きそうで届かないところで快楽が発生しつつあるもどかしさ。それに混乱している。

クリトリスを包むスライムが動いた。包皮の隙間に入り込み、ちゅるつと剥き上げる。

「ひ！ あっ！ あう……んああ！」

ピンク色の頭を出したそこにスライムが覆い被さる。痛みを感じないように、自らの身体を流動させて次々と愛撫の仕方に変化をつけていた。ぐにぐにと突起を揉んでいたかと思うと、すぐに転がすような感触へと移り、最後には豆に密着してぐいぐい引っぱる感触へ



と変わる。小さな突起がスライムの動きに合わせてぶるぶると動いた。

愛らしい秘壺からつうつと糸が垂れる。スライムはその液体を身体に受けながら、奥に向かつて入り込んでいった。セリティアの中のもどかしさが切なさに変わっていく。

「ううあ、や、やめなさい……だめ……こんなのお」

下腹部の疼きがどんどん強くなっていく。彼女は何か立ち上がろうと必死になっているが、焦りは冷静な判断力を麻痺させ、余計にその肉体を感じやすく変えていった。

魔物の本体が、脱力しきったクレアの身体を下ろして腕を伸ばしてきた。それはセリティアの肢体に絡みつきながら彼女の動きを完全に封じてしまう。

囚われの次女の股間からスライムが出すものとは違った音も出始めている。ゼリーの動く音に加え、愛液が膣口の奥から染み出し、ねちよねちよと練られる音だ。先端を細く分岐させたスライムがピンク色の肉穴を押し広げている。そして中に入り込んだ部分は膣壁を丁寧にくすぐり、処女膜を器用に避けながら狭い膣道を少しずつほぐしていた。

「あはあ……んんっ」

知らず大きなため息が漏れる。いつの間にか、身体に絡みついたゴム腕が彼女の胸を絞っていた。クロスの上を這いずって乳房を擦りつつ、タコの吸盤のように吸いついてきゅつきゅつと揉みさする。すっかり術中に落ちたセリティアはそれをはねのけようともせず、ただじつと感覚に耐えようと――裏を返せば快感を享受しようとするのみだ。

肉筒を埋め尽くしながらゆっくり打ち込まれていくスライムドリルと性器のあらゆる場所に吸いついてうねるスライムのせいで、彼女の股間はどんどん痺れていた。まるで股間のゼリー全体が吸い上げポンプの役割をしているかと思うほどに次から次へと愛液が溢れ、トロトロとスライムを伝っている。

しかしそれが外部に漏れることはない。クロスはつぐみの力で密着し、さらに、股間に開けられた小さな穴はスライムによって封鎖されているからだ。結果、彼女が排出した体液はまたしてもクロスの股間部分に貯蔵されることになっていた。

されど、男性のようにぷっくりと股間を膨らませる奇妙な姿はひどく美しい。白く瑞々しい肌には玉のような汗を浮かべ、身体の火照りに連動して紅潮した頬と苦しそうに目尻の落ちた瞳は妖艶に媚臭を漂わせる。開きっぱなしの口からは熱い吐息が繰り返され、凛々しさとは違う妖しげな美しさを醸し出していた。

「せ、先輩……っ！」

どこからか声がする。物陰から固唾を呑んで戦闘を見守っていた小島だった。彼が、生徒会長の危機を見て思わず声を上げていたのだ。

（ああ、見ないで……ねえっ、見ないでよ……！）

ぼんやりと視界に映る小島の姿を見て、彼女は泣きそうになる自分を感じていた。恥ずかしさで頭がチリチリと焼けついた。しかも彼の傍らでは、新聞部が相変わらずシャッタ

1をこちらに向け、恥辱のすべてを記録に収めている。

とても恥ずかしい——でも、どうしようもない。そんな諦めが心に浮かんでくる。どうしようもない……そう感じることで、彼女は逃避していた。

スライムの言いなりになってぴくぴくと身体を反応させるだけになったセリティア。その身体が絡みついた魔物の腕によって持ち上げられる。

(今度は……なに、を……する気なの……！)

彼女はしばらく移動させられたあと、そのままゆっくりと下ろされることになった。垂らした手足を地につける形で着地し、自然と四つん這いの格好になる。

そこでセリティアが見たのは、彼女の姉——シスタークレアだった。彼女は地面に四肢をついた姿勢のセリティアと向き合うように、仰向けに寝かされていたのだった。

「セ、セリティア……ごめんなさい、ごめんなさい……っ」

肉体の疲労とショックから立ち直れずに、クレアはいまだぐったりとしたままだ。おまけに彼女のクロスに充満していた精液が顔に飛び散り、いままも付着したままだ。弱々しく妹の名を呼ぶ姿からは、あの気丈な教師としての面影を感じることはできない。

「あうっ！ んんっ……！」

どう声をかけていいのか迷うセリティアの身体が、魔物のゴム腕に引かれて急に動かされる。犬のように四つん這いのままずりずりと前進させられ、顔を向かい合わせていた姉

との距離を作らされた。戸惑うセリティアの視線を、魔物は下品な含み笑いで返す。

セリティアの太腿に絡んだゴム腕に力が込められた。足が上方に引っぱられ、股が開く。その姿は犬が小便する姿を連想させるものだった。

(ま、まさか……そんな……!)

それに気づいたとき、セリティアの頭に一つの情景が浮かんだ。犬のように片足を上げ、小水をぶちまける自分の姿——しかも、その股間の下には姉の頭が配置されている……。ただ、いまの彼女に便意はない。その代わりに股間に溜まっているのは——。

必死になって足を閉じようとする動作は間に合わなかった。彼女が股間にもぞもぞした感触を覚えたときには、すでに最悪の事態は起こっていたのだ。

首を曲げた彼女の目の前にある股間から、愛液が漏れ出すのが見えた。それはゆっくりと重力に従い、姉の頬に向かって落ちていく……。

ぴちゃ、ぴちぴちぴちっ……!

クロス穴を封じていたスライムの栓が抜けていた。内部にたっぷり溜まった愛液が逃げ場を求め、穴から外界へと勢いよく噴出している。液体の流れは姉の顔にぶつかって、髪を濡らしながらだらだらと流れ落ちていた。

「あう……んぶうっ! く、るし……ごほっ!」

形のよい唇や精液のついた鼻先に容赦なく降り注ぐ妹の愛液とその匂いで、姉は息苦し

そうに呻いていた。適度な粘度で鼻に絡む液体は呼吸を阻害し、無意識に口腔を開かせる。するとそこに容赦なく液体が注ぎ込まれるのだ。

「ごほっ、んんっ！ ごほっ！ うはあっ……！」

ぐったりしたままのクレアは、ただじっと自分の顔を洗い流していく愛液が絶えるのを待つしかなかった。顔に張りついて乾燥し、ねばねばの増した半ゼリー精液が溶けるように流れていく。新たに降り注ぐ愛液の熱気と、精液が流されながら発散させる青臭い匂いが混ざり合い、草いきれのような生臭さが充満していた。

（だめえっ！ 姉さんが！ よごれちゃうっ！）

自分の股間から噴き出す液体を眼前で目撃し、何とかその流れを姉の顔面から逸らそうと身体をひねった。だが、魔物の触手はしっかりと身体の随所に絡みつき、がっちりと固定している。いくら動かそうとしても、肢体がわずかに悶えるだけだ。

ぶちゃ、ぶぼっ……ぴちゃ……ぴちゃ！

「あ、ああ……」

滴る音は一向に衰える様子もなく、セリティアの自暴自棄になりつつあった理性を再び呼び起こし、羞恥を倍加させる。

「やあっ！ やあああああっ！」

セリティアの悲痛な叫び。しかしそれだけで股間から溢れ出す愛液の流れを止めること



はできない。

彼女は残酷な現実には直面させられて、叫び、悶え、髪を振り乱す。まるで自分の行為が現実であることを受け入れまいとするように。

※

「お前の肉親なんだろうに……酷いことをする。グフアフア」

魔物の蔑みはシスターガーディアンの敗色をより一層強調していた。

しかしセリティアにはその言葉による屈辱も意味をなさない。そんなことは言われずとも自分が一番わかっているのだ。彼女の肩は、悔しさにぶるぶると震えていた。

股間の穴からの水流は次第に収まり、いまはポタポタと漏れるだけになっている。そこから最後に出てきたのは、さんざんセリティアを悩ませてきたスライムの断片だった。魔物はそれを自分の身体に吸収すると、セリティアの下からびしょ濡れのクレアの身体を引き出して再び腕の中に搦め取った。クレアはすでになすがままだ。

「さて、どうする？ この女は無気力すぎてつまらん。殺してしまうか？」

そんなことを承服できるはずがない。セリティアは俯いたまま小さく首を振った。衝撃が大きすぎて、言葉を出すことができない。

「取り引きしてやろう。そこにいる男どもの相手をして、俺の目を楽しませてみせろ」
四つん這いで俯いたままにいる彼女の動きが止まった。そして、ゆっくりと頷く。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>